

平成廿七年源心庵十番歌合 会記

判者 兼築信行

題 池水鳥 五番

忍恋 五番

左方人頭 伊藤久乃

左方人 天之原詩恩

左方人 金住昌美

読師 荒川克美

講師 大原稔

発声 青柳隆志

念人 田上富美子

念人 高野祐子

念人 土屋知人

右方人頭 吉野清美

右方人 井沢真紀

右方人 高橋栄子

読師 菅原秀太

講師 天之原泰洸

発声 シエーン・ハリス

念人 加藤晴乃

念人 多田知代子

念人 笠原雄二

員判童 三田百合菜

左 勝五負三持二 左勝

右 勝三負五持二

序歌

判 者

池水鳥 しのぼすの池の水面に朝まだき浮き寝の鳥も顔をあらへり

一番左 持

をし鳥は仲もよさげに池にゐてわれの心は風にこほれり(甲調)

一番右

水面ゆく鴨は乱れず連りてへんげん布陣誰が兵法ぞ(乙調)

判云、左、夫婦の仲睦まじきことをうらやめり。寡婦の苦しみ、さこそと思はるれど、いささか述懐に過ぎたり。

右、鴨の群れの泳ぐを軍陣に見立てたる、面白しといへども、いささかおそろし。よりて持となす。

二番左 勝

西方の浄土の池の水鳥は今ぞ飛び立つ金沙をけりて(甲調)

二番右

みづとりは池の水面をゆらしゆく時を忘れてわれただずめり(甲調)

判云、左、源信『往生要集』を思へるべし。仏教の心深し。極樂の黄金池のありさま、有り難し。

右、やさしく作りなせり。されど、歌の心弱し。以左為勝。

三番左 勝

不忍の池に張りたるうすごほりわりてや雁は山さしてとぶ(甲調)

三番右

流れゆく水鳥とほく波光り亡き人思ふ陽はあたたかし(甲調)

判云、左、森鷗外の小説を思へるなるべし、心、ことば、巧みなり。

右、亡き人を思ふ、ゆゑよしありげなれども、池の心、いささかおぼつかなし。以左為勝。

四番左

こほりとぢし池のをしまにひとりるとりはわが身とおもひつるかも(甲調)

四番右勝

朝日差す池の水面のつがひ鳥翳あはあはとに光に消ゆる(上甲調)

判云、左、鳥をひとりといへる、いささか心得難し。末の句の末、古き助詞(たすけことば)の「かも」に鴨鳥を掛けたると見ゆるも、いささか誹諧の体とみゆ。

右、世を過ぐしたる鴛鴦ならむか。さらさらしき歌と見ゆ。右をもちて勝ちとなす。

五番左勝

空襲に焼かれしひとを埋めしてふこの庭の池に水鳥あそぶ(甲調)

五番右

池水も空もひとつに澄む月の波の最中に鳥のただよふ(乙調)

右籙申、左歌、すぐれてあはれなり。されど、上句、すこぶる重ければ、「水鳥」いささか軽しと覺ゆるは、いかに。左陳云、「源心庵」の池は昭和廿年三月十日、空襲にて下町焼かれ、おほくの人うせにければ、亡骸をば、とみにもえ弔はねば、しばしとてこの池に埋めけるを、のちにあらためて葬りけるとなん、初案、「この池の水鳥よ啼け」とせるも、あまりにいみじとて、かく「水鳥あそぶ」と改めたり。

左籙申、右、いとすぐれたる歌なれども、彼の「最中」いぶかし。菓子なれば知らず、この言葉つづきいぶかし、故ありや。右陳云、一首の心深ければ、重ねて申すべきことあらず。左申、善哉。

(右念人後申云、拾遺に「水のおもに照る月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける」。菓子の最中は、この歌より名づけたるなれば、左の籙あたらすと云々)。

判云、左、源心庵の庭の池の由緒、深きこと限りなし。平和の尊さを思ふべし。水鳥は亡き人の魂てふこともあれば、魂鎮めの歌とも聞こゆ。

右、きよらなる歌なり。されども「最中」、いささか甘き思ひのすれば、以左為勝。

忍恋 空しくて過ぐる日数は重なりてさても口にはいだしかねつ (乙調)

六番左

冬の庭に真白き雪は積もれども熱き思ひに花ひらけなむ (甲調)

六番右 勝

ともし火をうつす聖夜に忍ぶれば恋はなほさらはげしくもえる (甲調)

判云、左の歌、「熱き思ひに花ひらけなむ」、春を待つ心にたとへたるか、いささか、忍ぶる心、弱しとみゆ。また、「ひらけなむ」、古し。

右、クリスマス、折にあへり、ともし火の火、もえる、首尾うるはし。ただし「恋はなほさら」以下の句、いささか冗長なりとみゆれど、なほ以右爲勝。

七番左

大空の陽に晒したし胸の内冬のこもりを終へるころには (甲調)

七番右 勝

今日も又胸にひそめし思ひをば言の葉にして書きつらねつ (乙調)

判云、左、「大空の陽に晒したし」。もしくは、せりつみし昔の人、「献芥」の故事をよまれたるか。顕昭法師の『袖中抄』にくはし。されどこれは大学院博士課程のレベルならんか。

右、むなしき思ひと見ゆ。あてなき文を書く心、題の心、あらはれたり。すなほにして、右をもちて勝ちとなす。

八番左 持

お下げ髪結ひし昔はわが思ひ告げ難かりき行船公園 (甲調)

八番右

高砂や友のとなりて笑ふ君こころざはめくやらむかたなし (甲調)

判云、左、をみなの歌なるべし。こは、思ひ出なり。かの恋いまはいかに。ただに、「忍ぶる」ことを詠ままほし。

右、結婚式の歌ならむ、下句「こころぎはめくやらむかたなし」、曲なし、よりに持となす、悪しき持といふべきにや。

九番左 勝

しのぶぐさこのはがくれのそののちは雪まにうづむ恋ごころかな(甲調)

九番右

ぬばたまの夜にしのべばもゆる身をさゆるがごとく月の影さす(乙調)

判云、左、草の、時のうつろひとともに落葉に埋もれ、やがて雪に埋もれて、いよいよ深く忍ぶる心を譬へたり。

右、夜に忍べば、思ひを鎮むるが如き月の光といへるか。うつくしき歌なれども、「しのぶ」、「おもふ」といへるがごとくにきこゆ。(判者呻吟ありて)左をもちて勝ちとなす。

十番左 勝

いづの日か逢ふこともがな面影を胸にしまひて髪はましろに(甲調)

十番右

目の前の海原風ぎて鎮まれど我が胸内に波はさかまく(甲調)

左籙中、よき歌なれども、風ぎたる海に、さかまく波、とは、いとことごとし、いかに。右陳云、然り。尤もなり。

右籙中、めでたき歌なれど、「忍ぶる」心浅しと見ゆ。また、「神」はおそろかに出だすべからず。判者、「神」にあらず「髪」なり。笑止。左陳云、こは女学生のころの思ひにて、半世紀ありありていまわれ白髪となるに、それを浅しとは心外千万なり。

判云、左、忍ぶるままに老ゆ、あはれなることかぎりなし、涙催すばかりなり。

右、左のいへる「風ぎて」「さかまく」、させる籙なし、されど譬ふるところ、いささか遠きか。また、右方、「神」と「髪」とをあやまてり、笑止。左をもちて勝ちとなす。